

【詩】

冬戯れ 富永 たか子

父 他界 高 裕香

トリプル・エルヴィス 長尾 雅樹

CH-R 出雲 筑三

覗き見――夢の記憶(5)―― 原 詩夏至

自然消滅 さとう のりお

秋の心象風景 高村 昌憲

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界(五十) 三浦 逸雄

【エッセイ】

器用ですね 神宮 清志

昭和は遠くなりにけり?(9) 高島りみこ

【童 話】

パンケとペンケ(8) 宿谷 志郎

【翻訳】

アラン『芸術論集』(五) 高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール(五十音順)

牡蠣割女は 手拭を首に二重巻きして 前ぶれもなくやってくる 挑み

実を掻き切って つるり とろり 日ぐれも一緒に 丼に入れる

記憶は 短夜への入口

牡蠣鍋の かきの無念のぶつぶつと聞く 父がいて 母がいて 少女は冬帽子をかぶったまま 順番を待つ 夕餉の匂の中

故郷は 遠くなったり 近くなったり

散り紅葉に ひかりは 時時刻刻と 景色を作りながら..... 苦しみもなく急に血圧が下がり眠るように 令和2年1月13日午後4時23分 父永眠する。90歳。

昨年12月に肺炎を患い入院の知らせ 最後に会ったのは、1月2日と3日 高カロリーの栄養点滴を受けて寝ていた。

「誰かわかる?」の呼びかけに 大きな声で「麗児!」 孫の二人にも反応し起き上がろうとした。

一人娘でもあったので父の膝の上で王女のように育てられた。

日本に永住し幸せだったのか? 認知症でも最後まで 子供達の名は忘れない!

いつまでも統一祖国を夢見てたけど 父にとって 子供や孫の存在が生きる糧だったかも。 静止動作が三つにブレて 目が四つの視線を正面に向けて ピストルを右手で腰の横に構えて 銃口は二つ重ねられて 右手も腰の横に折り曲げられて二本 エルビス・プレスリーの三つの振動が 左に右にずれて転写されて 三つの映像が重なりながら 鏡を持つ者の静止と動きが 三つの輪郭を起滅させている 白いワイシャツの襟が左右に二本 首は黒く蔭って三つに移ろう 顔は三面が重なり合って合体して 動く画面が全身を組み上げて 変貌する人体の動静が ずれることの振幅する喜劇に変換されて 銃口は定まらないままで焦点を外している 腰の皮帯は上下に段差を見せて 映写の残像を辿る身動きで 映像は正面に向って立ち構えているが 重なった身体はしきりにザザザと気狂いし 振動する肉体は目移りしながら爆ぜて 画面を点綴して振子の動作となる 三つに分裂した体型が小波を刻み 波紋は空間で幻覚の画像を印象させて 三つに動く物体で吃音を発するかのように 拳銃は黒い影を二つ孕んで 前方を威嚇しながら引き金を引く仕種で 横に四つの連なった目は蛙の卵なのだが 覚束ないエルヴィスの全身像が奇声を発する そろそろ陽が暮れてきました ランプの点灯をお願いします まだ少しハヤイノデハナイノ

ランプが点灯しておりません 前方三キロに故障車があります ご注意ください またアナウンスか テントウスルヨ

走行レーンをはみ出しました 小休止しませんか 路面工事車が停車中だったのだ フラツイタ訳じゃないよ

携帯電話を忘れてはおりませんか 電源切っただけだよ ここにあるよ

二時間走りました 休憩の時間です そうだな 次のSAに入るよ

駐車場は満員だ 右後ろから犬をつれたご婦人がきます カーナビをご覧ください 死角で見えない処だ ありがとう

サービスエリアをでます 逆走にご注意ください マア俺は大丈夫 イマノトコロワナ

お疲れ様でした 自動で車庫入れしますか いやいいよ 高齢者安全運転の訓練にも フィニッシュは俺が決めなくちゃネ 金の穂波の中を連れ立つ

制服の二人

男子と女子

ぎこちなさを今

ようやく乗り越え

なし崩しに笑顔に

お喋りばかりになり始めている

部活の帰り道

恐らくは

その様子を

樹上から

石地蔵の影から

草むらから

村中の大人が

見つめている

遠くの者は目配せを交わし

近くの者は突っつき合いながら

暖かく

とはいえ

こっそりと

ところで

その時

俺はどこにいたのだろう

見る村人?

それとも

見られる側?

金の穂波の中に固唾を飲む

男子と女子

近づく二つの顔

いつか

物陰のすべての目配せも 突っつき合いも静まり しんと固唾を飲む 晴れた真昼の村 気がつけば 冷たい小雨が降り続く初冬の朝

擦れ違いざまに老人に声をかけられた

くたびれた労働者然という感じの人は

胸のポケットからシワシワの地図を取り出し

「この場所知ってますか?」と言って私にそれを見せたのだが

「来た道と反対のあの辺ですよ」と教えると

ちょっとガッカリした様子で

「そうですか、間に合わないと今日雇ってもらえないんですよ、どうもすいません」 足速にもと来た道を戻って行った。

いつまで働けばいいのだろう

そういえば老い女性の人も工事現場でよく見かけるようになった

病気や会社の倒産かもしれないのに

世間はぐうたらな性格に違いないときめつける

思考停止の果ての優しさの欠けた同調圧力

女王以外軍隊と労働者しかいない蟻の社会 しかし常に3割の蟻は何もしないでぐうたらしているのだという そして その3割を取り除くと 残ったうち また3割ぐらいがぐうたらになるのだ

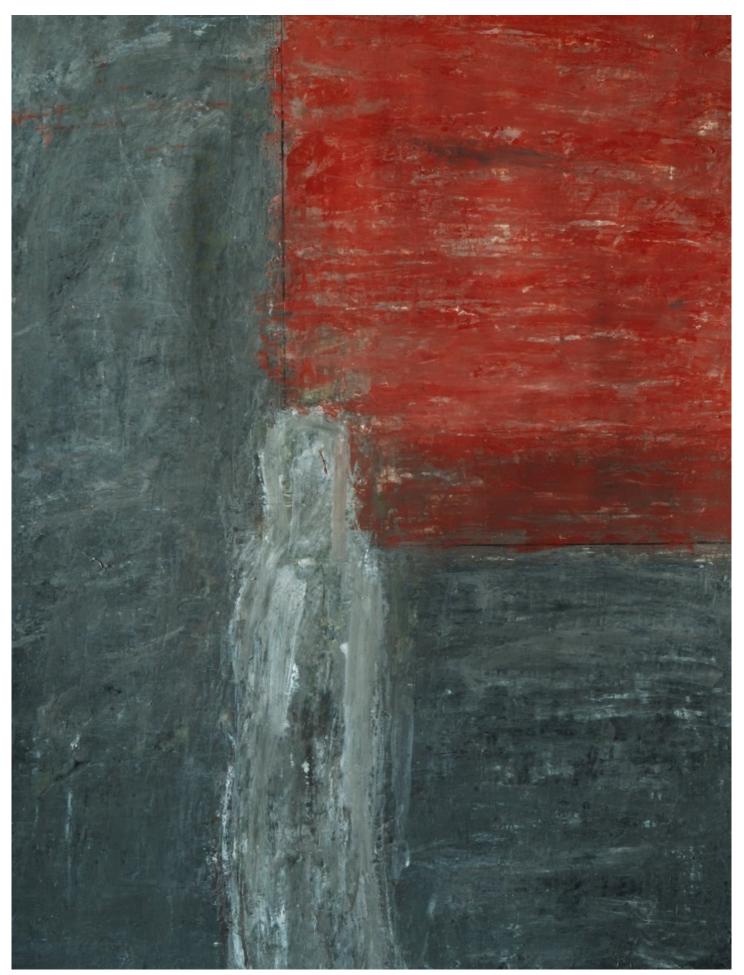
人の社会もこれでいいのでは ま、無理だな 秋が深まると楢や楓の木が赤く燃えている 春からの営みを全てこの季節で終える様に 赤く色づいた葉を枝に残した儘揺れている さようならを意味する何千本もの手の様に

鮮やかな朝を告げた日の光が柔らかくなる 無駄な動きが何もない名指揮者の腕の様に 夕陽の光線が一日の最後の色を奏でている 人間の一生で最も華やかだった色彩の様に

紅葉の主役は黄色でも緑色でもなく赤色だ 日の光も消える寸前には全てを赤く染める 赤くなるのはものが最後を表す色彩なのだ 赤い色に邂逅すると最後を見ることになる

血の赤い色は活動のしるしかも知れないが 最期の活動を表した死を象徴する色なのだ 壁も床も天井も赤一色では生きられないが 一点だけの赤い色なら生命と同調する色だ

赤色は生から死を暗示して安らぎを与えず 行動する者の死を描写するのに適している しかし勇者なら赤色を見ても危険と思わず 全ての愛に見る自死の逆説に気付いている



三浦 逸雄 「あかねのそら」8号(アクリル・紙)2020

地域に住む年金者によって作られた集まりがあり、入会者は五〇〇人を超える。この中でわたしは「古代史の会」「古典文学の会」「古文書と遊ぶ会」「太極拳」「歩こう会」「山の会」「ジャズの会」「カラオケ」「映画鑑賞会」等々に参加してきた。サークルに片っ端から参加してきたわけだ。それらは一つとしていい加減なものはなく、人生経験豊かな人たちの醸す集いは充実したもので、わたしの定年後の生活をどのくらい豊かにしてくれたか分からない。

その年金者の集いが毎年春に「輝こう展」という展覧会を開催している。わたしは能面師ということなので、この展覧会への出品を入会当初から熱心に要請された。わたしはごく軽い気持ちで引き受けた。断る理由などないし、むしろ喜んで出品させてもらった。毎年三面ずつ六年間続けて出品した。そして七年目から出品しなくなった。その前年あたりからひざを痛めて、階段とか坂道の上り下りが苦しくなった。この「輝こう展」の会場は高い丘の上にあり、その坂道を登るのが不可能になったのがその理由であった。それでは会からクルマを用意するからとまで言われたけれど、それはお断りした。出品者はみな年配者であり、その坂道を登るのを大半は苦しんでいる。そのような中でわたしがそんな優遇を受けるのはいかにも心苦しい。そうした肉体的条件も大きかったが、出品をしなくなったのはもう一つの理由があった。それはより深刻で切実なものだった。

急に出品しなくなったことによる人々の反応は、「何故か」という問いとともに非難の雰囲気があった。ある意味それは当然のことかもしれない。あるいはこんなことも言われた。「もう作品が無くなったわけでもないでしょう?」これは何故出さないんだ、という非難の意味が含まれている。あるいはすでに作品が無くなったと判断したのか「最初の頃に出した作品をまた出せばいい」という声も出た。作品が底をついたということは無論ない。まだ十年くらいは別の作品を出し続けることは出来る。こうなると出し惜しんでいる、ケチだ、お高く留まっている、と受け取られることになり、苦々しい思いに悩まされる。

展覧会に出品してから、わたしが参加するもろもろのサークルで、会う人々から称賛の声を聞いた。その多くが「器用ですね」「いい趣味ですね」というものだった。わたしはこの言葉を聞く度に、初めは違和感を覚え、しだいに腹が立つようになり、しまいには大いに傷つくようになった。そのように言われたのはこれまで経験がなかった。ときどき講演会に呼ばれると、能面を出来るだけ持って行って展示する。そのとき「器用ですね」「いい趣味ですね」と言う人は誰も居ない。また個展も四回ほど開催してきたが、そのときもこの言葉は聞いたことがなかった。本職に向かってこの言葉を言う人は居ないからだ。

伝統工芸の担い手として、それこそ時間とエネルギーと心を注いで作ってきた。日曜に休むというのはサラリーマンの世界のこと、伝統工芸の世界では基本的に休むことはない。それは落語家、能楽師、歌舞伎役者といった伝統芸の世界も同じである。正月にさえ、元旦から面作りをしたこともある。少し大げさな言い方をすれば、全身全霊を傾けて作ってきた。その作品を見て「器用ですね」「いい趣味ですね」はあまりに無理解にして、無神経ではないか。

しかしここで大急ぎで言わなければならないことは、この言葉を言った人々を非難することは出来ないということだ。褒め言葉として言っていることは間違いないからだ。いわば善意である。よっていけないのはわたしのほうなのだ。褒められて勝手に傷ついているのはまぎれもなくこのわたしなのだ。何が間違っていたのかというと、この「輝こう展」に出品したのがルール違反だったのである。一般の方が余暇の善用で作ってきた成果を披露しあうという展示会に、本職がその本業の作品を出品するということがルール違反なのである。そんなルールはどこにもない、と言われれば「不文律」なのだ。不文律を犯した者が受けた、これは罰だったのだと気が付いた。善意から出た言葉に傷ついたときほど、深手を負うことはない。この傷は癒しようがないのだ。

よって今後この不文律を犯すことはすまいと固く決意した。出品をしなくなったことについていかに非難されようとも、それは甘んじて受けなければならない。その点は十分覚悟は出来ているし、割り切れている。

しかしまだ問題は残っているのである。これでいいのかという忸怩たる思いが、じわじわと迫ってくるのである。

能面を一般の人が見る機会はほとんどない。めったに展示されることもないし、人々の関心も薄い。ということで我々伝統工芸の従事者は、その関心を喚起する意味もあり、広く理解していただきたいと思っている。またその義務もあるだろう。そんなときにこうした機会が与えられれば、喜んで出品して多くの人に見てもらい、日本の伝統工芸を理解していただくように努めるべきなのだ。なのにそんな個人的な、客観的に見ればごく小さい、どうでもいいようなことにこだわって、出品をやめてしまうなんて愚かしいことではないか。という声が耳の底から響いてきて、わたしを苦しめる。

それだけではない。「ロシア人のすべてが幸せにならなければ、生きることも書くことも欲しない」と書いたのは、ドストエフスキーである。「みんなの幸いのためなら、僕のからだなんか百ぺん灼いてもいい」と書いたのは、宮沢賢治である。このように優れた芸術家は自己犠牲の精神を強くもっている。それに引き換え、このわたしは何とちっぽけな心なのだろう。芸術家とはとてもいえない。単なる弱虫でしかない。年金生活者が集って、その仲間たちの展覧会で能面を見て、それなりに何か感じてくれれば、それでいい。そのために多少のことがあってもいいではないか。何故そういう風に行動できないのだろうか。この思いもわたしに重く圧し掛かってくる

しかしそれらは当分不問に付して、じっとしていようと思う。傷ついた心をゆっくり回復させる 時間をまずは作るべきかと思っている。(了) 北岳への弾丸日帰り山行きを敢行していたのは、もうかれこれ三十年近く前になるかもしれない。十月半ば、天気は快晴でダケカンバの葉が赤く色づいて美しい。空の青とその手前に広がる白が、いっそうダケカンバの赤を引き立てている。いや、ちょっと待てよ。あの「白」は何ですか? 稜線近くまで登るとその正体が判明した。雪である。前週には全くなかった雪が積もっていたのである。登ってきた側は緩やかな傾斜だが、稜線の反対側は切り立っている。「ここで滑落したら助からないかもしれない」という思いが頭をよぎる。低山歩き用の簡易アイゼンを持っていたので、靴に嵌めてへっぴり腰でなんとか頂上に到達。他の登山者たちは、この季節の登山に慣れているらしく、本格的なアイゼンを靴に嵌め、手には滑落防止のピッケルを持っていた。大事に至ることなく雪のない山小屋へ辿り着くことができたが、私がいかに自然を甘く考えていたか、一週間で光景が一変する三千メーター級の山の凄さを思い知らされた時でもあった。

山小屋で小憩してから、北岳を下る。小石と木の根を落葉が覆う登山道をひたすら下っていく。 気づかないうちに疲労が溜まっていたのだろう。途中で転倒、「バキッ」という音がして私は足 首を捻挫してしまった。幸い歩けないほどの捻挫ではなかったので、バス停のある広河原まで降 りてくることができた。バスと電車を乗り継ぎ、高円寺のアパートに無事帰還。湯に浸かって汗 を流し、ビールで乾杯。そして翌日、私の足首はパンパンに腫れあがっていた。天罰が下ったの である。それから三ヵ月近く、山からは遠のいた。

このまま山歩きを続けていても危険を回避できないという思いもあり、勉強のためにと山岳雑誌「山と渓谷」を買って読むようになっていた。ちょっと調べてみたら、「山と渓谷」は今も健在なんですね。懐かしい。「山と渓谷」通称 *ヤマケイ、は山の写真の他に、登山ガイドやショップの情報が載せられていた。その中に、隣りの阿佐ヶ谷駅にあるショップの情報が掲載されていて、時々山歩きなどの催しも行っていることが記されていたので、さっそく訪ねてみた。季節はすでに冬になっていて、この季節のお薦めのアウトドアはクロスカントリースキーだという。ゲレンデスキーのような重いスキー板ではなく、軽くて多少の傾斜も登ることができるテレマークスキーというのを履いて雪原をハイキングするのだという。面白そうなのでその場で申し込んで参加することにした。

初めてのクロスカントリースキーは長野県だったと記憶している。宿泊先のペンションで車にスキーを積み込み、近くの雪原へ向かう。常時十名以上の参加者があり、この企画は好評のようだった。それまでスキーなど全くしたことがなかったが、傾斜もほとんどなく、歩く感覚で前に進めるので、初心者の私にも充分楽しめるスポーツだった。このクロスカントリースキーのお楽しみのもう一つは、雪原のハイキングと謳っているだけあって、雪の上での食事が重要なのだ。携帯コンロで温かいスープを作り、フランスパンとチーズ、そして忘れてはならないワイン。これには嵌まって四、五回は通っただろうか。

しかし、である。ほんわかマッタリ雪のハイキングにも飽きてきて、もっと刺激のあるアウトドアスポーツを試したくなってきた。同じヤマケイの登山ガイドのコーナーには、パーソナルに山

岳をガイドする情報が載っていて、ガイド料の相場は一人二万円から三万円とある。た、高い。その中に「ん? これは安い」、一人一万円の情報が……。これなら行かれると、さっそく申し込んだ。場所は忘れてしまったが、どこかの岩場でのロッククライミング講座ではなかったかと思う。待ち合わせの場所に行ったものの、天気はあいにくの雨だ。「それでは室内壁に行きましょう」と言われ「??」だったが、ガイドの運転する車で埼玉へ。着いたところは二階建ての工場をぶち抜き、様々な色と形状のホールドが壁に取り付けてある室内のクライミングジムだった。今でこそクライミングジムはあちこちにできているが、当時は埼玉に二件、東京に一件しか存在していなかった。

ひとことでクライミングといっても、ロッククライミングにはいくつかのスタイルがある。私が思うに、一番危険が伴うクライミングスタイルはアルパインクライミングだろう。これはヒマラヤなどの山での雪と岩との闘いで、亡くなる可能性が最も高い。私の友人三名もアルパインクライミングで命を落としている。ヒマラヤ、谷川岳の一ノ倉......。そこには個人の技術、体力、精神力を超えたものがある。だからこそ、それ故にというべきか、アルパインクライマーは山に魅せられるのだ。人間は自然をコントロールすることなどできないのである。あるクライマーは私に「山ではないところで生きていると、刺激がなさ過ぎてつまらないから、近所の橋からこっそりバンジージャンプをしているんだ」と話してくれた。

その次の命知らずはアメリカンエイドというクライミングスタイルである。こちらは雪のない乾いた岩を登る。また紐梯子など、自分の体だけでなく様々な道具を使用していいのだが、安全確保のためのボルトを岩に打ち込んではならない。自然をクライミングのために破壊してはならない、という精神が根底に流れているのだ。岩の割れ目に取り外し可能の安全確保の器具を取りつけ、そこに自分の命綱を掛けて登っていく。取り外し可能ということは、外れる危険性も高い。また取り付けた器具はすべて回収しなくてはならず、ある程度登ったら、懸垂下降で降りていき、器具を回収していかなくてはならないのだ。器具は金属でできているため、安全を重視して器具を多く使用すればするほど、クライマーの担ぐ荷物の重量は増していくことになる。難易度の高い岩を登ることに成功すれば名を馳せることになるのだが、「落ちたら一発で死ぬ」というのが一番難易度が高いとされている。強者どもの世界なのだ。

私が始めたのはスポーツクライミングといわれているスタイルで、安全確保のボルトは岩や壁に打ち込まれていて、落ちたとしても自分の登った分の倍の距離を落ちるだけで、アメリカンエイドのように落ちたら果てしなく落ちていく可能性は低く、格段に安全になっている。そして私は、このスポーツクライミングに図らずものめり込んでいくことになるのである。(続く)



パンケとペンケ (十五)

ちょっと雨宿りもあったけど、いつしか西の山に太陽がかくれだんだん暗くなって来た。 ふたりはハンモックをゆらしたり、グルグル回しをしたりしながらあれこれおしゃべり。 ペンケちゃんが「ねえ、私たちいま13歳でしょ。里の子たちは15歳で大人の仲間入りするんだって」と話しかける。

パンケちゃんは「そうらしいね。でも僕たちは里の子たちとは違うからね。みんなのそばにいて あげるのが役目だし」と言いながらもちょっと複雑そう。

「ねえ、お星さまが見えて来た」「もっと暗くなったら、今夜はすごいぞ」ふたりは胸をふくらます。

あたりが暗くなると、すごいすごい満天の星。天の川もはっきり見える。「ねえペンケちゃん、あれが北極星だよ。星空はグルグル回るけど、あの星は1年中同じところにあって動かないんだ」感じ入ったふたりはもうおしゃべりはしない。だまりこんで星空をながめている。 僕もただただこわいような星空をながめた。



パンケとペンケ (十六) 冬の寒い明け方、パンケちゃんとペンケちゃんの登場。

「おじさん、雪景色を見に行こうよ」

「えっ、こんな寒いのに。どこへ?」

「ウサル川とペンケ川がぶつかるところがあるんだ。いつもペンケちゃんと会う場所さ。きれいだよ」

・・・しぶしぶ起きだして行ってみた。

小高い丘の上から、ふたつの川が合流するあたりをながめる。

さすがにいいながめだ。一面雪野原。

「あっ、シュマリ(キツネ)だ」ペンケちゃんも「かわいい」とさけぶ。

「おじさん、シュマリは何を食べるか知ってる?」

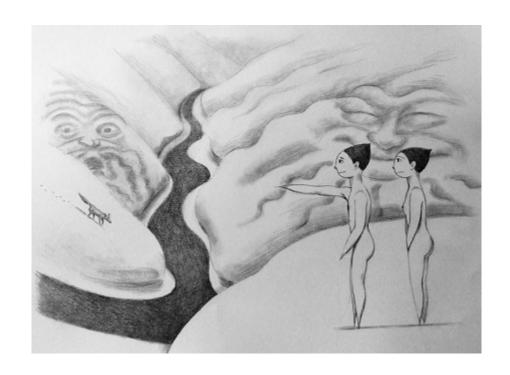
何を食べるんだろう、考えたこともない。

「?・・・さて」と思っていると・・・「シュマリはね、何でも食べるんだよ。ウサギでしょう、野ネズミ、リス、ヘビ、カエルそれに昆虫もね。シュマリはね、だいたい里の近くに巣穴を作ってね。人間の食べ物もねらってるよ」

「そう、里の人が飼っている鳥なんかも食べちゃうって」とペンケちゃん。

そうだったのか。愛嬌があってかわいいけどねえ。

そういえば、何かくわえてスタスタ歩いてるのを見たことがある。巣穴に運んでいたんだな。



第四章 人間身体について

人間身体は神々の墓場です。人々は自分たちの夢や情熱や衝動そして突然の厚意や慰めや開放感も又、何処からやって来るのか長い間探究していましたが、目覚めたり怒ったり苛立ったり自分自身の喉が詰まったりするメカニズムには余り注意しませんでした。そして次の瞬間に鎮まって、気を抜いて、緩んで、欠伸をして、伸びをして、眠ったりしますが、私たちが既知の力に従ってこのメカニズムを動かすという単純な考えを持たない限り、それは本来の法則に従うまでですし、私たちの判断も祈りもありません。私が理解するのは散歩をしたり、座ったり、寝たり、訓練したり、マッサージをしたりするもので、結局は多くの方法があります。私たちのためにあるこの小さな王国は、余りに身近であるため誰も余り疑ったりしません。怒りを鎮めるために二、三の体操で運動をしたり、自分を眠らせるために伸びをしたり、欠伸をしたりする考えを持つのは誰でしようか。世界や他人や自己を許すために大変に適切な姿勢として人間を跪かせるためには、教義という長い回り道が必要でした。

しかし、運動と休息というこれらの奇妙な制度そのもので最初は維持され、次にそれらの補整的な行動によって変形するという性質をそれらは全て持っていることを簡単な生理学に従って述べなければなりません。先ず、形と力によって異なり、関節のある骨格と関係している筋肉の群を理解しなければなりません。各筋肉は、休息状態とエネルギーの蓄積された状態では動物と同じで、機敏になり始めます。つまり些細な原因でも常に同じやり方で筋肉を収縮しますし、どんな生物も危険があり得る限り実際に紡錘形から丸い形に変わります。職業や芸術において訓練された意志が、良く調整された運動としての筋肉の群を獲得することを経験は理解させてくれます。しかし君主の眠っている経験が理解させてくれるのは、予期せぬ新しい印象が弱くても混乱したどんな群も目覚めさせて、各筋肉は不安になりながらも図に乗っていることです。それは不規則な力と各筋肉の疲労によって、そしてその時の形と位置によって、震え、動悸、不安、恐怖、熱狂、怒り、すすり泣き、笑いとしてそれらの騒動を生んでいます。

それらの動きが全ての筋肉を更にもっと良く目覚めさせたり、パスカルが大変良く命名した様に、散漫な注意力が必然的にこの種の肉体的反乱を悪化させることを理解するのは容易です。 医学が極めて進歩しなくても、何らかの注目すべき症状を見分けることは出来ます。先ず不安とは、心臓の鼓動が激しくなる抑えられた動揺であり、呼吸の乱れ、発熱、悪寒、発汗を伴うものでもあります。次に激怒とは、自分だけで増大する動揺であり、大きくなった荒々しさに従って、打つこと、走ること、叫ぶことの様に、私たちが一度始めたことを力の限界まで行うのを導くものです。苛立ちとは、辛い行為そのものであり、敏感な何らかの一点に生じた炎症によって倍加するものです。咳をしたり、体を掻いたり、喉の疲労が無理に話そうとしたり声を強めたりするのは、この苛立ちによるものです。筋肉の拘縮とは、特異な状態であり、その様な状態になると王様でもどんな行為でも禁じますが、自制することでは全くありません。各筋肉が他の筋 肉に対して働く結果、そこからは生命の息を締め付けに行く固く張り詰めた不動なものになります。これらの症状はどれもが長く続きますし、起こると直ぐにそれ自体で悪化します。それから自然と何時も補正するための症状が続いて起こります。そこでは働いていたものはどんなものでも休息しますし、休息していたものはどんなものでも働き出します。睡眠は、疲労による全ての発作を終わりにします。そして半睡状態とは、それ自体によっても長く続くものであり、そこで分かることは全ての心配も情熱も私たちから遠い不可解なものになり、一つの症状としても又数えることが出来るものになります。一日に一度は怒り出す、力強くて暇そうな人々は誰にも知り合いにおりました。しかし、もしもあなたが咳の発作の中に怒りがあることを観察したなら、苛立ちという大変に意味深い言葉をまさにあらゆる意味においても殆ど理解するでしょう。そして、この種の考察は私たちの思想の分析を行うことよりも、もっと情熱に近いものに導きます

この進展を厳密に私たちの主題に連れ戻すには、主に身体的状態の継承に存する想像力の働きが、機会に応じてそのことだけで怒りっぽくなったり不安定になって変わり易くなると言わなければなりません。しかし、それは規則正しい働きがなければ屢々不条理と支離滅裂に陥り、笑うことから泣いて涙を流すことまでに変わりました。それと同時に消え行くイマージュを追い求める子供たちの裡に観察出来る様に、乏しい対象と同じに動きも豊富ですが常に曖昧です。そして、これらの観察は屡々人類を赤面する機会のある人間に与えるでしょう。大変に一般的なこの生理学的な妄想との比較によって、詩や雄弁や音楽や行列が如何にして人から好かれて解放するのかを、私たちはこれから詳しく述べるでしょう。しかしこの重要な考えを前置きの中で考察しなければならなかったのは、多くの人々が妄想は諸芸術を導くと感じているからですが、少なくとも妄想は乗り越えなければならないという意味で、それは本当のことです。ここで支配しているのは音楽です。(完)

出雲 筑三 (いずもつくぞう)

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』(二〇一一年三月)・『波涛を越えて』(二〇一二年九月)・『五島海流』(二〇一七年五月)を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

高 裕香(こうゆうか)

一九五八年二月二一日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二○○七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二○○九年、二○一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとう のりお

一九五○年、新潟県生まれ。高校卒業後、絵の道に進みたく、反骨、反権力、ユニセックスの雄・長沢節主宰の「セツ・モードセミナー」に通う。四年で卒業後、五年間位エセヒッピー的なぐうたらではあるが、充実した生活を送り、色々あった後、印刷会「待望社」に入社。仕事を通じて、日本詩人クラブ理事長も務めた筧槙二氏と知り合い、彼が発行する動物に関する小冊子に短いエッセイを書くようになる。筧氏亡き後の二○○九年より、詩誌「山脈」のメンバーとなり、詩を書くようになる。尊敬する詩人は、筧槙二、ジョン・レノン、村上昭夫。日本詩人クラブ会員。

宿谷 志郎(しゅくやしろう)

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」(催華国氏経営)を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビックトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸(革絵)を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルート。よく聴く音楽はバッハ、モーツアルトの作品。

神宮 清志(じんぐうきよし)

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く(東京府千歳村)で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「蕗」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』(二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞)

装幀家(高島鯉水子)

究極の趣味はキックボクシング(アマチュア)!最近は試合に出ていないが...

高村 昌憲 (たかむらまさのり)

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部(仏文専攻)卒業。詩集『螺旋』(一九七七年)、『六つの文字』(二〇〇四年)、『七〇年代の雨』(二〇一〇年)。評論集『現代詩再考』(A&E・二〇〇四年)。翻訳『アランの「エチュード」』(創新社・一九八四年)、アラン『初期プロポ集』(土曜美術社出版販売・二〇〇五年)、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』(文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年)。共同編纂『齋藤怘詩全集』(土曜美術社出版販売・二〇〇七年)。一九九八年「現代詩と社会性―アラン再考―」が詩人会議新人賞(評論部門)。二〇一二年からパブーの電子書籍に、随想集『アランと共に』(全3巻)及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』(全5巻)『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永 たか子 (とみながたかこ)

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』(第二四回横浜詩人会賞受賞)

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊 し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹 (ながおまさき)

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

原 詩夏至(はらしげし)

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』(共著)、句集『マルガリータ』『火の蛇』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞)、歌集『レトロポリス』(第十回日本詩歌句随 筆評論大賞短歌部門大賞)『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄(みうらいつお)

- 一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。
- 一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七○年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。 一九七五年以降、現代画廊(東京・銀座)、東邦画廊(東京・京橋)他で作品を発表する。

(以上)

同人誌 風 狂 (ふうきょう) 第66号 2020年1月19日 発行

http://p.booklog.jp/book/129154

編集:風狂の会(担当:高村昌憲)

編集担当者プロフィール:http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile

感想はこちらのコメントへ http://p.booklog.jp/book/129154

電子書籍プラットフォーム:パブー(http://p.booklog.jp/) 運営会社:デザインエッグ株式会社